2011年11月15日朝日新聞（岩手）

朝日新聞　第3種郵便物認可

道一筋 技に美に

「現代の名工」県内から２人

卓越した技能を持つ技術者を厚生労働相が表彰する「現代の名工」に今年度、県内から2人が選ばれた。

世界中から修理の依頼

理美容用はさみ作り

金属手仕上げ工 久多良弘さん（59）

理美容のはさみ作りには、両刃が一点だけで接するよう、刃の裏をなだらかにへこませる「裏すき」の工程がある。久多良弘さん(59)はハンマーや研磨機など手作業で「裏すき」をする数少ない技術者で、10分の1ミリメートルの誤差で刃先を加工できる。

葛巻町出身。中学卒業後、知人の紹介で東京の理美容用はさみメーカー東光舎に就職した。刃の加工に携わるようになったのは入社20年近く経ってからで、先輩を手伝いながら手つきを見て削り方を覚えた。

現在は岩手工場（岩手町）で2人しかいない修理専門。世界中からの修理依頼を受ける。震災後は津波をかぶったはさみを無料で修理し続けている。

この道43年。切れる感触は理美容師によって好みが異なり、「今でも悩むことがある」。持ち主の思いをくみ取りながら、刃と向き合っている。

理容界に美容技法提案

震災２カ月で被災５店再開

理容師 湊　正美さん（63）

山田町や宮古市などで六つの理美容店を営む湊正美さん(63)は震災から約2カ月で、被災した5店すべてを再開した。受賞に「業界の復興に努めろと言われている気がする」。3月11日は山田町の自宅を兼ねた本店「カットインみなと」にいた。何とか逃げた高台で足元近くまで波が迫った。波が引くと店が流されずに建っているのが見えた。「またやれということなんだ」。家族やスタッフは全員無事だった。

横浜市の理容学校で学び、父の理容店を手伝うために戻った。腕試しにと36歳で理容技術を競うコンテストに初出場。県大会7連覇、東北大会で3度優勝した。「刈り上げ」主流だった理容界に、美容のファッション性やカット技法を採用するよう提案してきた。2月から県理容生活衛生同業組合の理事長。「被災地だと考えると受賞も複雑。でも一層、復興に向けてがんばらなくては」

2011年11月15日読売新聞（岩手）

（第3種郵便物認可）　2011年（平成23年）11月15日（火曜日）　読売

現代の名工 県内から2人

卓越した技術を持ち、各分野の第一人者として活躍する技能者を表彰する「現代の名工」に、県内から金属手仕上げ工の久多良弘さん（59）（岩手町）、理容師の湊正美さん（63）（山田町）が選ばれた。2人に喜びの声を聞いた。

職人のハサミ磨いて修理

金属手仕上げ工
久多良 弘さん 59
（岩手町）

研磨機の前で、ハサミの研ぎ具合を確認する久多良さん

大型研磨機械が並ぶ作業場に、金属のこすれる音が響く。手元に並ぶのは、曲がったりさびついたりしたハサミ。刃はオレンジ色の火花を飛び散らせながら、顔が映るほどの美しい輝きを取り戻していく。

「金属は削り過ぎたら戻せない。少しずつ磨いていく技術や感覚は、体で覚え込むしかない」。理容師などの職人が使うハサミは、一本ごとに癖がある。こすれた跡や、すり減った部分から使われ方を判断し、磨き上げる。

葛巻町出身で、現在も勤める理美容向けハサミメーカー「東光舎」に就職するため15歳で上京、先輩の技術を目で盗んで覚えた。工場が岩手町に移った30歳の頃から仕上げを任され、現在は最も高い技術が必要な修理を担当している。

国内外から1か月に100本ほどの修理品が届く。東日本大震災後は、津波被害を受けた沿岸部から依頼が相次いだ。連日夜遅くまで作業が続いたが、直接工場へお礼に来てくれた被災者の笑顔が何よりの励みになった。「これが正解という技術はない。これからも精進していきたい」

理美容融合の先駆者

理容師
湊 正美さん 63
（山田町）

真剣な表情で散髪する湊さん

25年ほど前、刈り上げや七三分けなどが主流だった理容技術において、立体感のある髪形を仕上げたり、様々なハサミを使い分けたりする美容技術を駆使して、理美容を融合させる先駆者となった。

山田町出身で山田高卒業後、横浜市内の理容専門学校を経て、父俊清さんの店を手伝うため戻った。民生委員や町会活動に忙しい俊清さんからカット技術を学ぶことはあまりなく、業界誌を頼りに独学で研究した。雑誌の写真を切り抜いてスクラップし、講習会があれば3時間かけて盛岡市へ向かった。「自分で想像力を働かせて覚えたから、型にはまらない技術を身につけられた」と振り返る。

カットの創作技術を争う県大会で36歳から7年連続優勝し、全国9位に入った実績を持つ。40歳代半ばからは県理容組合で講師役として、自分の技術・ノウハウを惜しみなく後進に伝える。

東日本大震災の津波が自宅兼店舗の2階まで押し寄せ、今は仮店舗で営業する。「町が復興して、慣れ親しんだ場所でまた店を開きたいね」と前を向く。

2011年11月15日毎日新聞（岩手）

〔第3種郵便物認可〕　毎　日　新　聞

「現代の名工」県内から2人

卓越した技能を持つその道の第一人者として厚生労働相から表彰を受ける11年度の「現代の名工」に、県内からは山田町の理容師、湊正美さん(63)と岩手町のはさみ職人、久多良弘さん(59)の2人が選ばれた。【山中章子】

仮設への訪問業務に道

理容師・湊正美さん(63)＝山田町

「被災した沿岸の理容室を早く再開させたい」。県内1260人の会員を抱える県理容生活衛生同業組合の理事長として、東日本大震災で被災した166人の理容師たちの1日も早い復興のため、日々奔走する。

自らも国道45号沿いにあった山田町の仕事場兼自宅が津波で流され、仮設住宅で暮らす。今年2月に理事長に就任し、理容業界のイメージアップに向けた改革を志したばかりのことだった。全国の組合に支援を要請し、道具を集めて被災した理容師たちに配った。全国理容連合会を通じて厚労省に規制緩和を訴え、従来禁止されている仮設住宅などへの訪問理容もできるようにした。

父親の後を継ぐため、21歳で理容師になったが、実家の店は客が少なく仕事はほとんどなかった。当時はビートルズの影響で、男性でもロングヘアが流行し始めていた。「このままではいけない」と美容師の免許も取り、コンテストに出るなど、積極的に技術を磨いた。

客離れ、後継者不足が進む理容業界だが、誇りを持って仕事をする理容師が増えることを願う。「ヨーロッパでは医者と弁護士の次に地位の高い素晴らしい仕事。もっともっと社会にアピールしていきたい」

6月にテナントを借りて再開した美容室「カットインみなと」で客の髪を切る湊正美さん

金属のくせ 知り尽くし

はさみ職人・久多良弘さん(59)＝岩手町

理美容専用のはさみを作って44年。「現代の名工なんて、縁のない話だと思っていた」と照れ笑いする。

岩手町に工場があるハサミ製造会社「東光舎」の職人として、現在は修理を専門に毎月約1000本を再生させている。理美容はさみは日に何千回と開閉するため、刃と刃の間には数十～数百マイクロメートルの隙間を「刃の裏側の「裏スキ」と呼ばれる部分にわずかな溝を彫り、軽快な切れ味を作り出す。

はさみ製造は一部機械化もされているが、こうした仕上げ作業は今でも一本一本、職人の手で行う。特にすり減ったり、変形したはさみを扱う修理は、金属のくせを知り、繊細な手指の感覚を持った熟練の職人にしかできないという。

葛巻町で生まれ育ち、中学卒業と同時に上京して同社に就職、同郷の先輩たちから技術を学んだ。30年前に岩手町に工場ができて帰郷し、今でも入社当初と同じ朝8時半から午後5時まで、はさみと向かい合う。

客の好みの使い心地に近づけるため、毎日が研究の繰り返しという。時折、客から届くお礼の手紙が励みだ。しかし一方で、一度修理したものでも、月に2、3本は再修理の依頼が来る。「技術を磨く道に終わりはない」と気を引き締めた。

修理に出されたはさみの刃を叩き、微妙な隙間を作る久多良弘さん

2011年11月15日岩手日報

（第3種郵便物認可）　岩手日報　2011年（平成23年）11月1

道究め「現代の名工」

本県から2人

厚生労働省は14日、優れた技能、業績を持ち、その道の第一人者とされる本年度の卓越技能者「現代の名工」を発表した。本県からは、山田町豊間根の理容師湊正美さん(63)と岩手町川口のはさみ製造工、久多良（くだら）弘さん(59)が選ばれた。湊さんは東日本大震災で自身の店が被災した中で選ばれた。本県の名工は59人になった。表彰式は15日に都内のホテルで行われる。

理容師

湊　正美さん(山田町)

「技術を次世代に」

震災で経営6店舗のうち5店舗が被災。避難所では、被災者の髪を切り続けた。県理容生活衛生同業組合員の多くが店舗を被災した。「組合に恩返しをしたい。皆が早く復活できるように頑張る」。理事長として復興へ向けて、奔走する。

父を継いだ2代目。理容だけでなく美容師免許も持ち、時代に先駆けて女性も通える理容室を実現した。高い技能を持つだけでなく美容材料メーカーと連携し、ストレートパーマ研究も行った。

理容師人生40年を支えたのは、師がいないコンプレックス。理容科を持つ横浜市の高校を卒業後、修業期間なしで山田に戻された。

「これからは美容の技術も取り入れるべき。自分で勉強するしかない」。通信教育で美容師免許を取得し、実力を試そうと36歳でコンテストに初出場。練習に明け暮れ、7年連続で県チャンピオンになった。

「苦労して習得した技術を次世代に伝えられれば、努力のかいもある」と強調する。

「皆が復活するのが一番だ」。自慢のはさみを手に、復興への決意を語る湊正美さん

はさみ製造工

久多良　弘さん(岩手町)

熟練の技能で理美容はさみを修理する久多良弘さん

向上心を絶やさず

国内外の理美容師が愛用する東光舎の理美容はさみ「JOEWELL（ジョーエル）」ブランドを熟練の技で支えてきた。

担当するのは、最も高度な技術を要する修理。傷み具合が一つ一つ異なるため、機械は使えない。刃を蛍光灯にかざして、0・01ミリ単位のゆがみを見極め、ハンマーでたたいて矯正する。

「刃の傷み具合を見れば、使い手の癖が分かる」。葛巻中を卒業してから44年。長年の経験と感覚が頼りの職人技だ。「お客さんに喜んでもらうことを常に意識してきた」と向上心を絶やさず、はさみの研ぎ調整を手作業で行う技術で、国内の第一人者と評される。

同社の岩手工場次長を務め、職人集団のリーダーとして後進を指導する立場でもある。「技術は話して身に付くものじゃない。本人が努力して体で覚えるしかない」。口数は多くないが、はさみと真摯（しんし）に向き合う久多良さんの背中を追うように、後継者が育っている。